

## ジャック・デリダとポール・ド・マン——もうひとつの脱構築をめぐる

### 1. Deconstruction is/in America

- ・ デリダ (1930年生) とド・マン (1919年生) の出会い: 国際シンポジウム「批評の諸言語と人間諸科学」(1966年10月、ジョンズ・ホプキンス大学、於合衆国ボルチモア)
- ・ デリダのアメリカ進出/脱構築のグローバル化の導き手としてのド・マン
- ・ 複数の言語=語法の「あいだ」での脱構築:

【引用①】脱構築は、ヨーロッパにおいて一種のハイブリッドな高まりをみており、一般にはいくつかの理論素、言説、学派に対するアメリカ的しるしとみなされている。このことは実際に、イギリス、ドイツ、イタリアにおいてとくに確かめることができる。しかしこの事象に対する本来の場、固有の物語はあるのだろうか。思うに、そこにあるのはただ、転移、転移についての思考であり、それも脱構築というこの語がひとつならずの言語で担ったあらゆる意味、なによりも諸言語間の転移という意味においてそうなのである。あろうことか私がそれでも脱構築について単一の定義をすれば、それはひとつの合い言葉のように短く、省略的で、節約的な定義として、文章の形ではなく、こう言うでしょう。plus d'une langue (ひとつならずの言語) と。(Derrida, *Mémoires*, p.38)

### 2. ポール・ド・マンによるデリダ『グラマトロジーについて』批判

- ・ ド・マンとデリダが交差する名としてのルソー、とくに『言語起源論』への着眼
- ・ デリダ『グラマトロジーについて』(1967年)とは——「ルソーの時代」——エクリチュール(書き言葉)に対するパロール(話し言葉)優位の歴史的体制を「現前の形而上学」として批判

【引用②】ルソー研究に対するデリダの際立った貢献は、ルソー自身のテキストが、ルソーのものとされた説に反駁するもっとも強力な証拠をもたらしており、そうして、現代のもっとも周到なルソー読者が達する地点をもはるかに凌駕していることを示した点にある。(ド・マン『盲目と洞察』204頁)

- ・ ド・マンの批判点——なぜデリダはルソーに「現前の形而上学」を読み込んでしまうのか?

【引用③】残された問いは(現前の形而上学)がうまく働かず、言語の暗黙裡の力に依存しており、その力によって破綻させられ根こぎにされるとということが示されるのに、なぜデリダはルソーのうちにそうした(現前の形而上学)を前提とするのかということである。(『盲目と洞察』208頁)

- ・ 「ルソーには盲点は存在しない」——ルソーを「文学言語」の徹底性において読むこと

【引用④】デリダは文学言語の本性について「正しく」ありうるし、またこの洞察を自分自身のテキストにも一貫して適用しうるのだが、にもかかわらず、彼は依然としてルソーを文学として読もうとはしないし読むこともできないままなのである。なぜデリダは、まさに彼自身が正当に行なっているのと同じことをしているという理由でルソーを非難しなければならないのだろうか。(『盲目と洞察』235頁)

【引用⑤】おそらくデリダは、著者ルソー自身をルソー解釈者へと置きかえてしまっている——つまりデリダが「ルソー」と書くたびに、われわれはたぶん「[ジャン・]スタロバンスキー」や「[マルセル・]レイモン」や「[ジョルジュ・]プーレ」を読むべきなのだ。(『盲目と洞察』236頁)

【引用⑥】ルソーを脱構築する必要などない。しかしながら、ルソー解釈の既存の伝統こそただちに脱構築される必要がある。[……]われわれは、ルソーに彼の批評家たちを脱構築してもらった代わりに、デリダに偽ルソーを脱構築してもらったわけだが、まさにそのための洞察を「本当の」ルソーから得ることができただろう。(『盲目と洞察』237頁)

【引用⑦】レトリックの問いについて、また比喩言語の本性について、ルソーは迷妄にとらわれていたわけではなく、みづからが言わんとしたことを言ったのである。そして同様に意義深いことに、まさしくこの同じ点において、現代の最良のルソー解釈者が、彼を理解しないために自身の道を踏み外さねばならなかったのである。(『盲目と洞察』231頁)

【引用⑧】ルソーのテキストに盲点は存在しない。それはあらゆる瞬間にそれ自身の修辞様式を説明しているのである。（『盲目と洞察』236頁）

### 3. ド・マンの批判に対するデリダの反応 ～ ド・マンの自己批判

【引用⑨】「盲目性の修辞学」におけるド・マンの批判ほど、私には容易に受け容れうと思われた批判はなかった。たとえこの批判に同意できると——かといって単純に不同意であるとも——感じられなかったとしても、私にとってかくも多くのことを考えさせられた批判は他になかった。（*Mémoires*, p. 124）

- ・ 書簡のやりとりはあったが公開のかたちでは応答しなかった。なぜか？——『メモワール』での応答——ド・マンの批判はいささか謎めいたところが残る。
- 他の論者（ロドルフ・ガシェ、スザンヌ・ギアハート、リチャード・クライン、ディヴィッド・キャロル等）がすでに優れた議論を展開している。
- ド・マン自身が自己批判をしている。ド・マンのデリダ宛書簡：

【引用⑩】あのときはルソーについてあらためて語る時間も場所もありませんでした。あなたに、この問題に立ち戻る理由があるかどうか私にはわかりません。あなたが「同意」——この語は私がド・マンへの手紙のなかで記した語である[デリダ註]——と述べていたものは親切心によるものでしかありえないでしょう。というのも、あなたが、私がメタファーについて述べていることに反論するのでしたら、当然のことながらすべてに反論しなければならなくなるだろうからです。私の論文は、議論の冗長さを避けるために、〔『グラマトロジーについて』の〕中心的な主張を弱めるわけではないと私には思われる一連の問いと議論の紛糾全体にまで立ち入ってはいません。それでも、なぜあなたがマラルメとおそらくはニーチェに付与しているラディカルさの価値をルソーに対しては拒否しようとするのか、私にはわかりません。これは歴史的な理由よりも解釈学的な理由によるものなのかもしれませんが、おそらく私が間違っているのかもしれませんが。このテキストは、私には原文に忠実なと思える翻訳で、10月に『ポエティック』誌に掲載予定です。（1970年7月9日付、*Mémoires*, p. 127；強調は引用者による）

【引用⑪】あなたの註釈は、私が依然としてルソー（およびニーチェ）をめぐる仕事をしている最中であるだけに私にとってこのうえなく貴重なものです。あなたの思考の基本的な内容については、われわれのあいだには何の不一致もなく、われわれがルソーをニュアンスづけたり位置づけたりする仕方のなかに一定の相違があるにすぎません。この相違は私にとっては重要なものです、というのも、私はあなた自身の思考を利用する以前にエクリチュールの問いについての諸概念にたどり着くことができたのですが、私にはそれらの概念がとりわけルソー（およびヘルダーリン）〔「ルソー（およびニーチェ）」に続き、第二の括弧、ここでは「ルソー（およびヘルダーリン）」——デリダ註〕に由来するものだったからです。あなたが言うように「何としても」ルソーを盲目性から免除したいという欲望は、それゆえ私にとっては、自分自身の道程に対して忠実であることの身振りなのです。ルソーによって私はある理解に導かれました。すなわち、容認されればの話ですが、あなたに開始する力を与えたものに近いと私には思われる、そうした理解のことです。『言語起源論』は私が長い間依拠し続けてきたテキストのひとつですが、そうして私は、自身がそこから恩恵を得た関連する洞察の弁護に情熱を注がねばならなかったのです。といっても、私はルソーを盲目性から免除しようとしたのではなく、そのエクリチュールの修辞性に特有の問いについて、ルソーが盲目ではなかったということを示そうとしたにすぎません。このことがそのテキストに特別の地位を与えているのであり、われわれはそれを「文学的」と呼ぶことについては同意しているだろうと思っています。この洞察がおそらくはより恐るべき盲目性——それはたとえば狂気でしょう——を伴っている〔によって二重化している：se double〕のだということ、それをこのテキスト〔『言語起源論』〕において言う必要はないと思われましたが、私は『対話』について、とりわけ『エミール』についてそのことを述べるでしょう。（1971年1月4日付、*Mémoires*, p. 127；強調は引用者による）

- ルソーを「何としても」盲目ではないテキストとして読もうとし、それを純粋な「文学言語」とみなそうとするド・マン自身の盲目性の問題

【引用⑫】本書のデリダ論において当てはまるように、私自身は、いくつかの不適切さを自覚しており、それについては別のところで対処しようと試みた。（『盲目と洞察』第2版、まえがき）

- ・ こうした自己批判に伴って、ド・マン自身が脱構築という用語の使用にますます自覚的になっていく。
- 「ド・マンの脱構築」の生成

#### 4. 「ド・マン的脱構築」とはなにか？

【引用⑬】「脱構築」という用語は、ここでは論争的というよりもむしろ技術的＝方法的な意味合いで用いられている。とはいえ、この用語が中立的であったり、イデオロギーとは完全に無縁なものになったりするわけではないのだが、結局、私にはこの用語を削除する理由が見当たらなかった。〔……〕私が初めてこの「脱構築」という用語と出会ったのはジャック・デリダの著作だったと認識している。そのことは、この用語が厳格な創発力 (a power of inventive rigor) と関係し合っていることを意味している。この厳格な創発力という視点が自前のものだと主張するつもりはないが、それを捨て去ってしまう気にはどうしてもなれないのである。容易に予想されたように、脱構築はしばしば毒にも薬にもならない思弁的なゲームとして誤り伝えられたり、拒絶されたりしてきた。あるいはまた、テロリストの武器として非難されてきた。だが、私はこうした無分別に対抗できるなどという甘い幻想は抱いていない。そのような期待は私自身の読みの方向＝趣旨にますます逆らうものになってしまうからである。(ド・マン『読むことのアレゴリー』xiv-xv頁)

——脱構築をめぐるド・マンのスタンスの変化。「脱構築」という語を方法論的な意味において徹底して形式的に——あるいは「機械的に」——使用しようと試みること。ルソーの脱構築的読解を試みるにあたって、イデオロギー的中立はない。(かつてはルソーの盲目性を免除しえたと主張した) みずからの盲目性を偽装することなく、脱構築の「発明的な厳密さの力 (a power of inventive rigor)」にコミットしようとする態度表明。これは、脱構築の方法論化につねに警鐘を鳴らそうとするデリダのそれとは異なる姿勢。

【引用⑭】ド・マンは『読むことのアレゴリー』の序文において「脱構築」という術語をデリダの著作に負っているのを認めているが、実のところデリダとまったく違った仕方でのこの術語を用いているということだ。実際、この違いに注意しなければ、ド・マンのいう「脱構築」の独自性を見失う危険があるし、デリダの著作とド・マンの著作とが接しあう瞬間をも見失うことになりかねない。さしあたり、ド・マンは脱構築の観念を明示的に適用するところではデリダと違って、むしろデリダという名にまったく言及しないところでこそデリダに近いのだ、と言うにとどめておこう。(ロドルフ・ガシェ「「措定 (Setzung)」と「翻訳 (Übersetzung)」」清水一浩訳、『思想』第1071号(2013年7月)262頁)

- ・ デリダとの関係をめぐるド・マンの自己認識——文献学者ド・マン vs. 哲学者デリダ

【引用⑮】私は、デリダが与えようとするよりももっと強力な権威をテキストに内在するものとする傾向があると思います。作業仮説として、テキストはみずからが為すことをある絶対的な仕方において知っていると思定します(作業仮説としてというのは、本当にそう思うほど愚かではないからです)。私はこの仮説が実は間違いであることを知っていますが、ルソーはつねにみずからが為していることを知っており、そうしたものとしてルソーを脱構築する必要がない、というのが、必要な作業仮説なのです。ある込み入った仕方において、私は次のような言明を支持することでしょう。すなわち、テキストとは、テキストの外部からの哲学的介入によって脱構築されるというより、「自己自身を脱構築し、自己脱構築的である」という言明です。デリダとの違いは、デリダのテキストはあまりに華麗で、鋭利で、強力であるために、デリダにおいて何が起こるにせよ、それは彼と彼自身のテキストのあいだで生じるのだということです。デリダはルソーを必要としていませんし、他の誰も必要としていません。それに対して、私はまさにそれらを必要としているのです、というのも、いささか厄介な理由なのですが、私は独自のアイデアをけって持ったことがなく、それはつねにテキストを通して、テキストの批判的検討を通してのものだからです…… 私は文献学者であって哲学者ではありません。おそらくそこに違いがあるのだと思います…… (ド・マン『理論への抵抗』232-31頁；後者の強調は引用者による)

——デリダ的脱構築：デリダという哲学的才能による「介入」→「過剰性と饒舌さ」のエクリチュール

——ド・マン的脱構築：テキストの字義性そのものに内在する文献学→「稀少性と寡黙さ」のレクチュール

- ・ 『パピエ・マシン』(2002年)におけるデリダの応答：

【引用⑯】十分おわかりのように、これはもちろん間違っています。ド・マンは間違っていました。私はド・マンを必要としていました。そしてルソーも、アウグスティヌスも、そのほかの多くの人々も。しかし今度はわたしが、長い時間が経ってしまったけれどもド・マンに代わって、彼がわれわれに伝えるべきだと考えていたことを示し証明するために、ド・マンはルソーなどを必要としなかったことを明らかにする番でした。(『パピエ・マシン』264頁)

5. まとめに代えて：「脱構築の応用可能性」をどのように考えるか

- ・ デリダの口吻を模倣して脱構築の方法論化不可能性を強調するだけでは「脱構築」の複数性を開くことはできない。脱構築の神秘化（否定神学化）の危険性。いかに単純な模倣による形骸化に抗しつつ、形式化可能性を肯定しうるか。
- ・ ド・マンの脱構築に対する功績：脱構築の形式化の可能性について徹底して思考した。  
——脱構築の形式化を推し進めることによってこそ、当の不可能性との臨界点を浮き彫りにできる。
- ・ 「脱構築の教育」をどのように考えるか。テキストそのものに語らせるべく、当のテキストをめぐって読み書きすることの技法。  
——形式化可能性（ド・マン）と不可能性（デリダ）のあいだでの決定による「もうひとつの脱構築」をいかに遂行するか。テキストを読むことをめぐる「発明的な厳密さの力」への信：新たな文献学のほうへ

■ 関連文献リスト

- ・ ジャック・デリダ (Jacques Derrida)  
*De la grammatologie*, Paris: Minuit, 1967; 『根源の彼方に——グラマトロジーについて』上巻、足立和浩訳、現代思潮社、1972年／同下巻、1974年  
*Mémoires – pour Paul de Man*, Paris: Galilée, 1987; 抄訳「貝殻の奥に潜む潮騒のように——ポール・ド・マンの戦争」島弘之訳、『現代思想』1989年4月臨時増刊号「ファシズム」  
*Papier Machine* (Paris: Galilée, 2001); 『パピエ・マシン』上巻、中山元訳、ちくま学芸文庫、二〇〇五年
- ・ ポール・ド・マン (Paul de Man)  
*Blindness and Insight: Essays in the Rhetoric of Contemporary Criticism*, second edition, revised, Minneapolis: University of Minnesota Press, 1983; 『盲目と洞察』宮崎裕助・木内久美子訳、月曜社、2012年（初版からの翻訳）  
*Allegories of Reading: Figural Language in Rousseau, Nietzsche, Rilke, and Proust*, New Haven and London: Yale University Press, 1979; 『読むことのアレゴリー』土田知則訳、2012年  
*The Resistance to Theory*, Minneapolis: University of Minnesota Press, 1986; 『理論への抵抗』大河内昌・富山太佳夫訳、国文社、1992年  
« Jacques Derrida's *De la grammatologie* », *Annales de la Société Jean-Jacques Rousseau (1966-68)*, 37; 「ジャック・デリダ『グラマトロジーについて』のルソー読解」宮崎裕助訳、『現代思想』2012年10月号、184-189頁
- ・ その他、二次文献  
Richard Klein, "The Blindness of Hyperboles, the Ellipses of Insight," *Diacritics*, 3.2 (Summer 1973).  
Rodolphe Gasché, "Deconstruction as Criticism," in *Inventions of Difference: On Jacques Derrida*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1994.  
—— "Setzung' and 'Übersetzung'" in *The Wild Card of Reading: On Paul de Man*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1998; 「「措定 (Setzung)」と「翻訳 (Übersetzung)」」清水一浩訳、『思想』第1071号 (2013年7月) 247-292頁  
Suzanne Gearhart, "Philosophy Before Literature: Deconstruction, Historicity, and the Work of Paul de Man," *Diacritics*, 13.4 (Winter 1983).  
Robert Bemasconi, "No More Stories, Good or Bad: de Man's Criticisms of Derrida on Rousseau," in *Derrida: A Critical Reader*, ed. David Wood, Oxford: Blackwell, 1992.  
*Deconstruction Is/In America: A New Sense of the Political*, ed. Anselm Haverkamp, New York University Press, 1996.  
土田知則『ポール・ド・マン——言語の不可能性、倫理の可能性』岩波書店、2012年  
宮崎裕助「弁解、機械、ランダムネス——ポール・ド・マンと読解の倫理」『現代思想』1999年3月号、116-129頁  
—— 「読むことの盲目と明察——ジャック・デリダとポール・ド・マンのあいだ」『現代思想』2004年12月号、228-240頁  
—— 「法のテキスト／テキストの法——ポール・ド・マンにおけるルソー『社会契約論』のキアスム読解」『現代思想』2012年10月号、190-206頁  
—— 「弁解機械作動中——ルソーの「盗まれたリボン」をめぐるポール・ド・マンとジャック・デリダ」『思想』第1071号 (2013年7月) 101-127頁